
ゼロの使い魔で転生物

sion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔で転生物

【Nコード】

N9073J

【作者名】

Simon

【あらすじ】

現実で一人の少年が剣と魔法にあこがれた。彼はただひたすらに自分の夢を追いかけて、気付けば彼は魔法がない世界でひたすらに人を救うことに意味を見出していた。

そんな彼だからこそ、命を落とす場所は最初から誰かを助けるときと決まっていたのかもしれない。そして自身の生涯に悔いを残すことなく逝った彼は、気付けば三途を渡っていた。

プロローグ：転生まで（前書き）

初めまして、シオンといます。

この小説はオリ主最強（予定） 転生、原作キャラとのカップリング、多重クロスなどの要素があります。苦手な人はどうかここでお戻りを、読んでくださる方はよろしくお願いいたします。

今回は長つたらしく転生までの道を書いております。それではこの程度で、お楽しみいただければ幸いです。

プロローグ：転生まで

―始めはただ、憧れただけだった―

少年は幼い日に見た、いくつも年上の兄氣が持つ漫画に、その漫画に描かれていた魔法を使う少女に、剣を振りかざし少女を助ける戦士に、ただ胸を躍らせたただけだった。そして少年は目を輝かせて親にこういうのだ。

「僕は大きくなったら魔法を使って剣を使って、悪い人を倒すんだ！」

少年のそんな無邪気な声に、親は目を細めてこう言い返す。

「そうね、大きくなったらできるかもしれないわね、そのためにお手伝いも頑張ろうね」

嬉しそうに少年は頷いて、そして親の手伝いにも精を出した。少年は少し成長し、小学校に入った。3年生を過ぎてなお、魔法と剣が出てくる物語が好きだった。けれど、魔法なんてものがないことくらい、その年の少年の常識として知ってしまった。

だからこそ、少年はただひたすらに剣を振るい、ただひたすらに体を鍛えた。魔法がないのなら、せめてあの戦士のように強くなろうと、そう思い少年はひたすらに走り続けた。

―次第に少年は、世界を知っていった―

中学に入り、少年はそれでもなお走り続けていた。いや、今までよりも走る速度を上げていたのかもしれない。それまではあの戦士の

ようにとひたすらに剣道に励み、体を鍛えるという理由で走り続けていただけだったのが、現代の剣道に違和感を覚え、数少ない剣術を学び、そして剣がない時でも動けるように少年は柔術を学んでいた。才能は、剣はそこそこ、柔術は人並みにしかなかった。それでも少年は才能の有無を努力する時間と効率で補っていた。ただそれだけに時間をかけた。

「・・・それでは、もう少し勉強もさせるようにお願いします」

「はい・・・言って聞かせます。ほら！お前も頭を下げて！」

成績が不振で親を呼びだされたりもした。中学で呼び出されたというのはいまだに苦い記憶で、少年は少し勉強にも手を出した。それでも少年は、使える時間のほぼすべてを剣術と柔術の時間に充てていた。そして暇な時間を使って勉強をして、そして少年はそれでも残るたったわずかな時間で、魔法が出てくる漫画を、アニメや映画をひたすらに見続けていた。無駄と知りながらその魔法を現代知識で説明しようと、少しでも知ろうとして。

「・・・わかんねえ」

自分の知識が人より劣ることに気付き、愕然として、少年は勉強にもかなりの時間を割くようになった。このころの少年は、幼い自分よりも少し成長して、そして将来の夢と書かれた中学最後の進路調査で『正義の味方』そう書き記した。担当の先生は警察か何かだろうと判断して処理してくれていた。

―少年は、青年へと姿を変えていく―

高校に入っても、青年のやることは変わらない、ただひたすらに自

分を鍛えて、ただひたすらに自分の夢のために走り続け、そして理想を見ることを決してやめなかった。暇な時間、つまり学校での休み時間などでも漫画を読む時間が増え、クラスの見解としてオタク認定されても青年はめげなかった。別段気にしていなかったということもあるが。ただ変わったことがある、青年は自分の将来の夢にこう書き記すのだから。

『一人でも多くの人が救える職業』

認められない、はつきりと書けという担任の言葉に、進路指導の教師に、意地を貫いて認めさせた。正式な書類には警察、消防官、自衛隊とそれらしい言葉が並べられていたが。そんな彼に転機が訪れる、それは大学に入って最初の出来事。彼は不承不承ながら警察学校に入っていて、そこで一人の初老位にも見える老人と出会ったのだ。

「ふん！今年も気骨があるやつが一人もおりやせんな！」

老人は、新入生である青年たち一同を道場に並べて一瞥くれると、吐き捨てるようにそう宣言した。それに対して罵声を上げるものもいた、ただしその愚か者は1分後に白目をむいて倒れていたが。そんなことすら青年は気にも留めず、ただその老人を見つめていた。青年の目に焼き付けられたのはその老人の一連の動作。

愚か者を前に呼び出し、担当教官になるだろう物を顎で使い引つ張りだし、自分の目の前に立たせ、そして青年が見切れるぎりぎりいっぱいの早さで、愚か者は三度地面にたたきつけられていた。興奮が止まらずに、青年はついに列を崩し、老人の前へと歩み出ていた。教官が止めようとするのを老人が手で制し、そして老人は青年を見つめて問いかける。

「なにようかな、新入生」

歯牙にもかけられていない、だがそれすらも凌駕して青年は喜んで
いた。かつて学んだ師匠とどちらが強いだろうと、剣術の、柔術の、
二人の師匠を思い描いて、それでも目の前の老人のほうが強いだろ
うと予測する。

「一手、御教授願います！」

青年は構える、今は武器などない、だからこそ無手で老人に勝負を
仕掛ける。担当教官が何かを喚くが今意識を逸らしたら為す術無く
老人に刈り取られると本能で察していた。老人は呆れたように溜息
をつき、同じように構えてくれた。次の瞬間、老人の姿を一瞬青年
は見失い、咄嗟にはなった下段の回し蹴りをあつさりと飛んで交わ
され、背負われて空を舞った。気付けば畳に横たえられている自分
を老人が覗きこみ

「・・・ま、気骨があるものが一人もないといった言葉は撤回し
てやろう」

呵呵と笑い飛ばされていた。青年は、初めてと言つていいくらい気
持ちよく完敗を喫した。心を折られたわけでもなく、ただ純粹に負
けた。そして警察学校の時代、ただひたすらに走る青年は、老人の
手によって鍛えられていく。

―青年の世界は広がっていき、やがて青年は大人になった―

「わしより先に死ぬなよ、未熟者」

それが老人の最後の言葉で、彼はその言葉に感謝の意を持って頷いていた。不承不承の警察学校ではあったが、彼にはこれまで以上の収穫でもあった、そして彼は警官へとなっていた。

希望してなった最前線に配置される部署、誰かを助けるために常に彼は走りまわった。何かを救うために常に彼は走り続けていた。そんな彼が心配だと言ってきた同僚の女性が、気付けば彼の家を守ってくれていた。女性は彼に言い放つ。

「あなたの帰ってくる場所は私が守る、だからあなたは好きなだけ誰かを助けて来い！」

そんな女性に彼は不器用ながらも笑みを見せて頷きを返す。彼は、それを境にさらに走るようになった。子を為して、それを笑いながら受け入れて、そして自分がしたいことのために、彼はアメリカの警察と交流交換という事情で3年間単身赴任をすることになり、いざついてみれば家を守ってくれている筈の女性がそこにいた。

「は？あなたが帰る場所を守るのが私の仕事でしょう？何当たり前のこと聞いているのよ。それよりもなに？あなたは一義と仁美を残していく気だったの？」

本気で怒鳴られ、反省したのは後にも先にもそれだけだった。銃社会での生活、そこでも彼は最前線で走り続ける。何度も銃と対峙した、けれど、いくら銃が早いと言っても引き金を引くのは銃を持っているだけの素人が大半で、なにより剣の初速は視認できないものも多く、師匠方には見せないように此方を捕らえてくる者もいた。それ故に、彼はその銃社会でも警棒二本で殆どことなきを得ていた。

―それでも彼は、少年時代の願いを諦めていなかった―

日本に帰ってさらに数年がたち、彼の子供も大きくなった、それに伴い彼は自身の体が少しずつそのスペックを下げていき、少しずつ動く動作が最適化されていく感じを得ていた。そう、動けない身体スペックが、彼の思考に追い付くように勝手についてくるのだ。彼は、30台を過ぎてもまだ戦えていた、走り続けていた。前線から遠のく昇進は個人的に蹴っていたが、功績的に放置するわけにもいかず、彼は前線にいるくせに指揮するものよりも位が高いという稀な事例となっていた。

周りは口々にこういう「彼は楽しむことなど知らないだろう」と。が、彼をよく知るもの、更には子供たちはこういう「あの人は子供っぽいんだ」と。

そんな彼は、夢を追い続け、理想を見続けていた。剣術を、柔術を、合気道を、システムを。戦うだけではだめだと彼は理系も文系も問わず学び、言語を英語とロシア語だけとはいえ必死に学んだ。人を助けるためにも人を知るためにも医術もかじった。そして彼は暇な時間にこんなことをしている。『各々の世界に対する魔法の考察』それは現実では一切無駄になる知識、けれども彼はこれを喜んで纏めていた。彼の行動理念は、すべて子供の時の無邪気な夢に追隨しているのだから。だから彼は、致命的な状態に陥っていた。

周囲は火の海、たまたま取れた休み、久しぶりにと無理を利かせて旅行に出かけたのがそもその始まりだったのだらう。泊っていたホテルが炎上したのだ。彼は急いで自分の子供を、妻を導いてホテルから脱出し、そして有無を言わずにホテルへと飛び込んで行った。何度も往復する彼は、何人もの人を助けていた。そして、自力で逃げ出した人も含めて最後の一人、ホテルに取り残された少女を彼はエントランスロビーまで連れてきたところで啞然とした。帰る

ための道が崩落してふさがっているのだから。すぐさま来た道を見るが、そこはさらに燃え盛る火によって閉ざされていた。

呆れたように溜息をつく、救助は・・・間に合わないだろうと彼の経験で予測をつけた。

ならばと彼は思い立ち、動ける範囲でありつたけの布を集め、それをかぶせたうえで燃え盛るホテル、そのカーペットの中にもぐりこみ、胸の内に少女を抱きしめて仰向けになった。意識がない少女を一撫でして、彼はおもむろに携帯をとりだす。

「・・・仁葉、一義、仁美。最後かもしれないし残らないかもしれないがこうして残させてもらう。一義、俺の息子だ、俺のように無茶をするかもしれない、けれど、自分の信じたものだけは絶対に曲げるな。強く生きろ。仁美、おまえが俺に似なくて正直ホッとしている。こんな無骨な男に似なくてよかったと思う。あまり構ってやれなかったな、すまない。俺みたいな男とは添い遂げるなよ?・・・仁葉、おまえの御蔭で救われた。おまえがいたから俺がいれた。間違いないおまえは良い女だ。だから、俺を忘れてこれからも生きてくれ。この言葉が、おまえを縛らないことを祈る・・・」

ボイスレコーダーの機能をつけたそれに彼は話しかけ、まだ余裕があると思い最後に1を押してから電話をかけた。

「あなた！今平気なの！？入口が焼け落ちて！」

女性のあわてたような声、いつも気丈な彼女の涙ながらの声を聞くのはこれで5回目だと彼は思い、苦笑して耳を傾ける、少し音は遠いが、親父！お父さん！なんて声も聞こえる、それが今、無性にうれしくて

「ああ・・・すまないな。携帯に残した、それと・・・子供たちを頼む」

それだけを伝えて彼は電話を切り電源を落とし、そして携帯をそつと少女のポケットに忍ばせた。あとはただ、自分を防火剤にしてこの子を守るだけだと思い、彼は笑みを浮かべて涙をこぼす。「未練はあるが、後悔はない・・・ああ・・・」そこでうつすらと少女の目が開かれ、少女の目にはその光景が飛び込む、少女の耳には、彼の最後のつぶやきだけが残った。「幸せだった・・・」

それから一日、ホテルの火が消し終わり、彼らは発見された。後背部全てが焼けただれ、唇をかみしめた跡がある男の死体と、呼吸困難を起こしてこそいるがそれ以外は目立った外傷がない少女の二人。第一発見者となった熟練の消防官は、ただその光景に息を呑み、数瞬の後、待機していた救助班に連絡を取り、酸素を取り入れられた少女は、無事に生還を果たした。彼は、一人の少女を最後まで守り抜いた。

その出来事は大々的に取り上げられ、美談として語られた。一人の犠牲のもとにある美談ではあるが、そのニュースを読み上げるキャスターはこう告げる、「彼は英雄でした」と。そしてそのことを誇りに思い、それからの生涯を独り身で通した女性と、父の後を継いだ学生がいて、彼の娘は、母に似るために彼のような人を相手に選んだ。助けられた少女は、それから先どんな場所で将来の夢はと聞かれてもこう答えるようになった。「死ぬ間際に、幸せだったと言いたい切れるのなら、何をしてもいいかな」と。

―彼は、少年の時の夢を果たした―

「や、起きたようだね」

気軽に声をかけてくる少女がいて、彼はゆつくりとあたりを見回した。そこにあるのは一面の赤、そしてその中心を別つように流れる川に浮かび、ゆつくりと船に乗って移動しているのだと彼は悟った。首をかしげ、少女を見て、そして問いかける。

「オレは死んだと思うんだが・・・ここはいつたいどこかな？お嬢さん」

そんな彼の問いに少女はけらけらと笑って自分を指さし胸を張ってこう言い返す。

「死んだあんたが船に乗り、その船頭をしているとなったらそれは死神さね。ああ、一応名乗ればアタシの名前は小野塚小町、死者の水先案内人さ」

その時の彼は、生前から数えてもかなり上位に上るほど間の抜けた顔ではあと呟くだけだった。そんな彼に構わず、小町と名乗った死神は構わずに続ける。

「いや、ここにきて意識がある靈魂なんてここ数十年拝んでないからね、ついつい嬉しくて話してしまうのさ！あんた、生前は善行をかなり積んだと見えるね？なに、心配はいらないよ！善行を多く積んだ魂は輪廻の輪の中にも早く入れるからね！きっと新しい来世がすぐに来るさ・・・と、もうついたのかい。これは感動を通り越してあきれ果てるね」

彼女の言葉に耳を傾けながらついた先、立派な門構えの建物に小町の先導のもと彼は続く。途中、小町の言葉は途切れることなく続いていたが、彼はそれを聞き入れるほど余裕はなかった。そして小町

が立ち止り、見上げた扉はこれまた立派な拵えだった。

「この先に我らが閻魔、四季様がいる。粗相を働くんじゃないよ？」

それだけ注意して門が開かれ、目の前に広がる光景、その先に彼女はいた。小町以上に幼い容姿、年の頃合いでいえば中学生でも通用しそうなそれは、かつての恩師に相当、それ以上の風格を持っている。だから彼は無意識に、恩師にするように武道の礼を取っていた。

「はじめまして、安部正儀。私の名は四季映姫。貴方を裁く者への橋渡しが今回の役目となります」

厳かに言い放つ、その声は静かにけれど彼を、正儀を圧倒していた。その風格に圧倒されて声を出せない正儀に対して四季映姫は何事かを思い、それも数瞬で消して彼の前へと歩み寄る。そして一度だけ頭を撫でようと背を伸ばし、それに対して小町が息を漏らし睨まれて、それでも彼女は正儀の頭を撫でた。

「大丈夫、貴方の善行は疑いの余地がありません。さあ、着いて来なさい」

そしてゆっくりと手を離して、やはりゆっくりと歩いて行く、小町はしまったなあと呟きながら舌を出して、それでも楽しそうに去っていき。一人取り残されそうになった正儀は慌てて四季映姫の後を追っていった。それほどの距離を歩く間もなく、四季映姫はある扉の前で立ち止まり、ここですと小さく聞きとれるぎりぎりの声量で呟いてから、やはりゆっくりとその扉を開けた。正儀の目の前には、
・人としてあり得ないサイズの大男が待っていた。

「来たか、貴様を歓迎しよう、人間」

地を揺るがすような声が、人を死に追いやれるような圧迫感が、空気を震わした音量が、一気に正儀を責め立てた。彼はただひたすらに、気を失うことを耐えるために自身の唇を噛みしめる。そんな中でも、私はこれだと悠然と下がる四季映姫に改めて敬意を表して、彼は目の前のあり得ざる巨軀に改めて対峙する。しかし、そんな正儀の覚悟などどこ吹く風と言うように巨軀の持ち主は喜悦を含ませながら言葉を続けている。

「昨今の人間はここまでではないと思っていたのだがな、ああ氣にするな人間。貴様は間違はなく希少だが、貴様は稀有な存在だ。そしてここ、閻魔の裁判所ではそのものの善行に比例して次の世界への輪廻を決めるのだが・・・」

そこまでいつてから、巨軀はこれだけは仕方がないのだと溜息をついて、呆れるように苦笑を漏らし、正儀を見つめた。

「何、貴様の善行に対して此方が用意できる対価が相応しいものが無くてな。神や閻魔として取りなすには足りぬし、世界と契約するあれは半ば奴隷契約だから外れる。人としての生に対しても貴様の条件を聞くことはできるがそれにも限度がある。だからな人間」

巨軀は口の端を吊り上げて正儀の目を視線で射抜き「貴様の願望をのぞかせてもらっぞ」

その言葉が響くと同時に、正儀は意識を失った。

どれほどの間意識を失ったのかは知らないが、正儀は自然と目覚め、そして起きぬけに強面の巨軀に笑い飛ばされるといって、人生で間違はなく3指に入る最悪の目覚めをすることとなった。

「魔法が使いたいか、人間」

面白そうに、巨軀は笑いかける。その問いかけに、正儀の頭は凍り付いた何故と疑問を駆け巡らせる。そんな正儀の様子を見て、更に巨軀は肩を震わせて笑い飛ばす。そしてこともなげに貴様の深層心理をのぞいただけとかえされて、正儀は思考を半ば放棄し、そういうものだと言った。

「それで、オレがそれを望むとどうなるんだ」

自分の望み、理想を上げられて正儀は確実にいらついて

「ならば使える世界に行かねばなるまい？ああ、貴様が生きていた世界で魔法が使えるなんてことは不可能だから必然別世界だ、ならばあの輪廻の輪に入れるか・・・ああだが、それだけでは少したらんな・・・数にすればおよそ十と言ったところか・・・ふむ」

そんな巨軀の独り言に思考を一気に取り戻し、それまでの苛立ちなど払拭されていた。信じられないものを見るように正儀は巨軀を見上げ、それに気付いた巨軀がいくつか説明を始めた、要約すると数点にまとめられる。

1つ、世界は複数あり、人の想像によって完成した世界も多くある。
2つ、魔法が使える世界には相応のルールがある、基盤を曲げることとはできない。

3つ、そういう世界はある程度完成していて、けれど永遠に未完成の世界である。

4つ、ある程度の善行を積んだ者をたまにその世界に転生、意識のみを憑依させ、時折世界を拡張させ、世界が消えないように調整している。

5つ、根幹は初めに作った人の想像、枝分かれした人の思想で大樹がなされ、それが世界となっている。

要約すればそういう話を、目を丸くさせながら聞き入った、そして今聞いた話が間違いでなければ、巨躯は正儀を魔法が使える基盤がある世界に行かせるという。それは、彼を喜ばせるのに足る理由だった。若干感じ入っている彼に、躊躇いながら巨躯は声をかける。

「だがそれだけでは、貴様の積んだ善行分に足りぬのだ。故に人間、魔法が使いたいという貴様の願いだ。生来使ってみたかった魔法もあることだろう、世界の基盤に逆らわぬ条件のもと、大凡10個、使える質次第で20にも増えるが、貴様の望む魔法とやらをくれてやる。尤も、世界は選ばせられぬから無駄になる可能性もあるがな。そしてその魔法に相当するだけの才覚は約束しよう。これが貴様の善行分だ」

そして閻魔が出した転生の条件を彼は纏めた。それは彼にすれば破格ともいえたのだ。

1つ、知識及び体にしみこませた身体技術を継承させる。性格的なものは継承させない。何故知っているかだけ漠然と理解している。前世のほかの記憶は一切残すことが出来ない。

2つ、世界の基盤に対応しているのなら、10の魔法を好きに使わせてもらえる。また、魔法の才覚は世界の基盤を乱さない程度にそれに付随して吊り上げる。難易度の高い魔法ほど使用できる魔法の数が減る。また、その魔法に付随する効果があるならそれはすべて習得させるものとする。

3つ、魔法基盤のある世界へと転生させる。

それも尤もな話、死後世界を保つために人を振り分けることがある、

その流れに彼が入っただけだからそれでは善行分とはいえなかったのだ。そして、彼は問われた10の魔法、質的におそらく下げれば倍以上にも上る覚えられる魔法について、彼は悩む。世界の基盤、それを覆すことはできない。それを彼はこう解釈した。

例えるならば、スレイヤーズと呼ばれる小説がある。その代表例は竜破斬と呼ばれる魔王呪文だろう、だがこれを他の世界で使えるかと考える。単純だ、他の世界には魔法の基盤となるであろう魔法に対応する魔王がない、それ故にその魔法は不発とならざるを得ない。逆にいえば、ハリーの魔法にある火を灯す、物を浮かべるなどは大概の世界で基盤を順守する、故にその魔法は使用できる。

そう思い、彼は多くの世界で対応できるだろう魔法を模索した、知識だけなら十全だ、なにせ彼はその生のほぼ全てを幼い時に掲げた『剣と魔法で悪人を倒す』に準拠しているのだから。だからこそ彼は考えて、一刻ほどを思考に充てる。そして考えるのはその優先度、恐らくだがこの選んだ魔法に酔って自身の魔法才質が決まると彼は予想する。それ故に本来は最高難度の魔法を属性ごとに均等に分けるのがいいだろう、だが、属性等がなければその多くが無駄になる。だからこそ、彼は二つの属性に絞る。人として生きていくことに必要な水、生命が生きていくうえでその種を保つのに必要な土。そして、ダメもとで二つほど願望を忍ばせ、癒しを優先する。ふと顔を上げた彼に、迷いがないところを見た曲がその手を頭に充て

「優先順位1位リフレッシュ：2位ケアルガ：3位グラビダ：4位インブレイス・エンド：5位リバー・グラビティ：6位固有時制御：7位エレメンタル・ラース：8位メイルストローム9位フル・ポテンシャル：10位グランバニッシュ・・・か」

つらつらとあげるそれに対して巨軀はしばし思案し、それと同時に

目をつむり一切の音を遮断した。そんななか、ゆるやかに流れる時間を正儀は緊張しながら待ち、どれくらいたっただろうか。ふと、巨軀が目を開け、それと同時に口を動かす。

「固有時制御は認められぬな、あれは神の領分だ。例え一番に希望しようがそれは認められない、それ以外は・・・まあ認められる範疇ではあるな、だいぶ偏つてはいるが。まあいいだろう。ではそのように取り計らおう・・・さて、これから先、貴様がどう生きようとそれは貴様の自由だ。尤も、今の貴様と同じ人間にはなりはしないがな。さあ・・・」

そこまで言つて、巨軀に似つかわしい大きな腕が再び正儀の頭にかざされる。その腕から何か温かい物を感じ、正儀はそこで意識を失った。「行くがいい」そんな重厚な声が最後に耳に残っていた。

「生まれたか、リリア！」

男が部屋に駆け込み、息を切らせて、それでも顔には隠しきれない不安と笑みをたたえて目の前にいる女性に声をかける。そんな突然入ってきた男に、女性は最初驚いて、すぐにその顔に微笑みをたたえて迎え入れた。

「ええ、無事に生まれましたわ。さあ、貴方、この子に名を」

世話をしていたらうその女性から、生まれてまだ数時間しかたっていないであろうその赤子を大事そうに男は受け取った、その手はこれ以上ない宝を得て緊張したのだろう、震えてしまっていたが、それでもしっかりと抱きしめていた。

「ああ・・・名を、おまえの名前はウィル、ウィリアム・アステイル・ル・グラン・ド・アルザス。我がアルザス侯爵家の跡取りとなるのだ」

「ええ・・・良い名前。ウィル、アルザス家の嫡男として気高く、

強く、優しくあるのよ」

そんな夫婦が祝福し、まなじりを下げてだらしなく緩む中、生まれたばかりのその赤子はキャツキャと笑い声をあげているのだった。

プロローグ：転生まで（後書き）

主人公の要望とか結構でたらめですねえ、改めてみると。私が何のゲームやってるか丸わかりです。

それぞれの魔法、出るたびに此方に説明を書いております。また、主人公の設定などはひつようですか？とだけ聞いて、それでは一読のほどありがとうございます。

次回までプロローグ形式で進み、学園に入ったあたりで本編とさせていただきます。

ブログ2：学園入学手前まで（前書き）

書きためがあつたのですぐ投稿、と。今回で学園入学手前まで一気に時間を飛ばします。独自解釈、ご都合主義も含みますが、その点は了解のうえです。よろしくお願いします。

プロローグ2：学園入学手前まで

ウィリアム・ド・アルザスは侯爵家という名門の家柄を背景に何不自由のない生活を送っていた。何気なくあれ欲しいなあと呟いてしまったものが翌日には揃えられてしまっていたりしたことには若干の驚きを覚えていたが。そう、何不自由のない普通の幼少期を送っていたのだ。ウィルが3歳になった時には妹も生まれた。だが、そんな生活にある種の転機が訪れる。それは5歳の誕生日の時、父に渡された未契約の杖によって引き起こされた。

「ウィル、おまえももう5つだ。そろそろ魔法の基礎を学んでもいいだろう。そこで今回はお前が契約する杖を用意した。なに、一級の職人が拵えた杖だ、間違いはない。始めは少し長く感じるかもしれないが・・・」

渡された杖は5歳が持つには少し長く、けれどもウィルはそれが何よりうれしくて、期待に目を輝かせて目の前でほほ笑む父と母を見回してから嬉しそうに杖をかき抱いた。それから3日間、ウィルは父と母の監修の元、杖に自身の血を垂らし契約を為していく。そして契約がなされたと父と母が太鼓判を押した杖を手を持った瞬間。ウィルは気を失った。

流れ込むのは異界の知識、彼が生前に培った知識、そしてそれに引きずられて彼は気を失っている間に身体に入ってきた経験情報のせいで痙攣を起こし、ウィルの母は慌ててヒーリングをかける。ウィルの母であるリリアは水のスクエアであり、下手に治癒メイジを呼ぶよりも自身で魔法をかけたほうが正確なのだ。

彼の意識は、その二日後にようやく戻った。起きたウィルは自分に

あり得ない知識があることに驚き、しかしそれを当然のように受け入れた自分がいることに何故か安堵した。そして何故か使えると思えた9個の今までのこの世界、ハルケギニアの本では学べなかった魔法の存在、そしてこの世界の魔法の自己の解釈。それらを人に話してはいけないという自戒、それらを持って彼はけれど今までの性格を変えることなくそこに在れた。父と母は目覚めたウィルに涙ながらに抱きついて本当に喜んでいた。そこからのウィルは、自身がおかしいと思われない程度に魔法の腕を上げていく。

「・・・錬金！」

5歳の子供が出来る範囲で、覚えてた魔法を魅せるように、彼は青銅を作り上げる。そんな様子にリリア達は目を細める。優秀なメイジを雇い教師としたのも功を奏したのだとそう考え、2歳になるウィルの妹、アリアを抱きかかえながらそれを嬉しそうに見守っていた。だが、彼は一人で魔法を練習することが多々あった。それはアルザス領の中でも人が来ない、しかし魔獣もいないそんな静かな森の中にある湖のほとりで彼は魔法の練習をしていた。

「使えるのは分かる、オレが使っていていい理由もわかる・・・どんな魔法かも知っている。」

眩きながら杖を構える。この世界の魔術基盤、その前提の一つが杖の所持。そして目をつむり、彼はゆっくりとその口を開く

「氷結は終焉、せめて・・・刹那にて碎ける！インブレイス・エンド！」

空間が凍結する、眼前の世界が凍りつき、上空の空間が凍結して天から落ち、目の前の凍った湖を叩き潰しながら沈んで行った。ラン

クにすればスクエアの上位、そもそも詠唱の基本が違ふその魔法、ウィルはこれを唱える前に呟くように口を動かそうと決めた。それと同時に、頭にある魔法の知識が本物であるということを変更して理解し、改めてこの世界の基本的な魔法に勉強の観点を置いて行く。

7歳でラインになり両親を喜ばせた、社交の場にもこのころから出るようになり、礼儀作法を改めて学ばされた。このころから、自身の領地に赴くようになる。

「ウィル、最近領地へ行き領民の畑仕事を手伝っていると聞くが・
・それは本当か？」

「はい父上。私は確かに領地へと行き民を手伝っています」

言外に少しの隙をあらわしながらアルザス侯爵は尋ねる、なんのためかと視線で答えを求める。だからこそウィルは笑みを持ってこう答えた。

「畑をよりよい環境に整えるのは土と水のメイジである私にとって何よりの魔法の練習となるのです。常に土に触れ、水で整えることで精神を使い、同時に民も喜ぶ。なので私は私にできる範囲で畑を整備しています。これで出来高が上がればさらに嬉しいですね」

その言葉に侯爵は満足したのかそれ以上の苦言を一切漏らさずに、ウィルのことを黙認した。それからたびたびアルザス領では若い貴族の少年が杖を片手に奔走する姿が度々目撃される。

10歳になり、トライアングルまでの魔法を人に見せるようになった。土と水のトライアングルメイジとして、かつてガリアの皇帝シヤルルに迫り、勝るとも劣らないとまでの評価を得るようになった。

この年になって初めて、同じくゲルマニアと国境を挟み対峙するヴァリエール公爵家へとウィルは足を踏み入れた。

ヴァリエール公爵とアルザス侯爵が歓談する中、ウィルはヴァリエールの三姉妹を紹介される。ウィルより9つ年上の長姉エレオノール、6つ年上のカトレア、そして二つ年下のルイズ。エレオノールはすでに魔法学院を卒業しており、来季から王立アカデミーで務めることが決まっていると言われ、カトレアは身体の調子が悪く魔法を使うと寝込んでしまうのだと聞かされ、そしてルイズは魔法を使おうとすると必ず爆発してしまうのだという。

ウィルの知識の中にある情報でルイズのことは何とかできるかもしれないが、ウィルは現状助けが必要なのはカトレアだと思い、ルイズよりも病弱なカトレアのほうへとその意識を向けていた。彼は、手の届く範囲なら一人でも多く救いたかったのだから。そして彼の持つ特殊な魔法、リフレッシュならばカトレアが助けられるかもしれないとそう思い、だが同時に、これまで高名なスクエアメイジですら手も足も出ず、それこそ自身の母でさえ手の施しようがなかった病を高々トライアングルの自分が治せるのはおかしいと思い、だからカトレアにこう宣言するのだ。

「オレがスクエアになったら絶対に直してやる！」

それを受けてカトレアは柔らかに微笑んでこう返す

「もし治せるのなら、その時は私の全てをかけて貴方に報いて見せますわ、ウィル」

そんな二人の誓いを、さりげなく聞いていた大人達は眉尻を下げてにこやかに見守っていた。そして同時に、もし本当に治った時はカトレアをウィルの相手として婚約を結んだのだった。家柄は由緒正しき公爵家、そして相手の家も同じく由緒ある侯爵家、つり合いに

関しては何一つ問題なかったのだから。しかし、トライアングルからスクエアになる道はとても厳しく険しいというのが世界の常識で、ウィルはすぐにスクエアになるという愚行を起こすわけにはいかなかった。

それからまた時が流れる、ウィルは魔法にそして何故か肉体が覚えている剣を、武術を鍛えていた。幸いにして、国境を睨むアルザスの家系は軍を率いていることもあり、彼の行動は家を継ぐための努力として大人達を喜ばせていた。また、ウィルが畑を魔法で整備した甲斐があつてか、アルザスの領地で産出される農作物の出来高が1.2倍に膨れ上がっていた。豊作の時期と比べて遜色無い出来高に恵まれたアルザス領はそれなりの繁栄を示している。また、ウィルの妹であるアリアも杖と契約し、兄のようにと毎日のように励んでいた、その甲斐あつて彼女もまた10を数えるときにはラインへとその魔法の腕を上げていた。

だが、ウィルは自身がスクエアになったということを誰かに伝えるきつかけがつかめずにいた。そんなウィルに対して好機が訪れる。それは彼が14歳の時、ラグドリアン湖の湖畔で行われた各国交えたパーティーの時である。彼は一流の貴族の息子、つまりアルザス侯爵の自慢の一子と言うことでそのパーティーに参列していたのだが、彼は湖に行かなくてはいけないという強迫観念に襲われて一人静かにその姿を湖のほとりへと消していた。

遠目から見える一組の男女、そんな二人を邪魔しないように彼は湖を覗きこむ。幸いにして時間は夜だ、彼らも意識をしつかりと向けなければウィルに気付くことはないだろう。そして彼が湖を覗いた瞬間、湖が歓喜した。ラグドリアンの湖には精霊が住む、代々モンモランシ家が管理するそれはトリステイン王国の象徴ともいえる存在だった。尤も、それ故に水の精霊のご機嫌を損ねたモンモランシ

家は王家から降家を言い渡されて衰退の一途を辿っているのだが。

水の精霊は姿を現して、そして嬉しそうにウィルのことを包み込む。

「ようやく会えた、異なるものよ。貴方を待つて月が幾度交差した
ことか。貴方は私たちを惹きつけてやまない。もはや単なる者に貸
す力は無いと言えど貴方のことを助けたくて仕方がない。貴方の力
になりたいと私たちの全てがそう告げるのだ」

告げる言葉には歓喜を、表す姿は美しい女性を、浮かべる表情は人
で言う笑みを。そして水の精霊は、ウィルのことを湖へと引きずり
込んだ、そこにウィルが抵抗する余裕など皆無で、そしてウィルに
抵抗する意思など全くなかった。水の中で精霊はウィルを包み込み、
そして抱きかかえて祝福する。ウィルの全身から水の精霊の因子が
入り込む、人の体の構成物質の半分以上が水の精霊の加護を受ける。
気付いた時ウィルは、優しいその感覚に抱かれるまま眠りについて
いた。

「・・・み、・・・か!?・・・き・・・」
「・・・ズ様・・・で・・・か」

ウィルの耳に雑音が聞こえノイズが混じる、それは人の声のようではあるが途切れ途切れで、半ばまでしか覚醒していないウィルの耳朶をしたたかに打ちつける。少しの間だけ覚醒を待ち、改めて耳を傾ければ。

「君！大丈夫かい!?・・・意識があるなら返事をしてくれたまえ
！」

「ウェールズ様、ヒーリングはかけ終えました、きつともうすぐ」

一組の男女が必死に声をかけ続けていて、仕方なしにウィルは目を覚ました。

「ああ、よかった。意識はしっかりしているかい？」

「大丈夫でしょうか？」

目の前にいるのは金髪がまぶしい男、そしてトリスティンの貴族ならだれもが知っている少女、その姿を確認したところでウィルは急いで姿勢をただした。

「申し訳ありません、アンリエッタ姫殿下。お手数をおかけいたしました、もう大丈夫です」

その突然の変わりように二人は目を丸くして、顔を見合わせて声を上げながら笑い合った。

「ははは、ああ僕はウェールズ、ウェールズ・テューダーだ。だがまあ今はただのウェールズに過ぎない、楽にしてくれると嬉しい」
「ふふ・・・今は私もあのパーティーが嫌で抜けだしてきたところなの、だから楽にしてくださいね？ところで貴方のお名前は？」
「尋ねられ、少しだけ居心地が悪そうに身をよじりたい衝動を押し殺して、ウィルは告げる。」

「アルザス侯爵の子、ウィリアム・アスティール・ル・グラン・ド・アルザスにございます。お初にお目にかかります、姫殿下」

「ん？アルザス？アルザスと言うとリリア殿の子かね？」

「はい、リリアは私の母でございます」

その会話の後ウィルは姫の隣にるのがアルビオンの王族であるを知り、ウィルの母であるリリアが元アルビオン貴族のしかも公爵の

出であることを知り、また同時にフレンドリーすぎる王族二人に半ば呆気を取られて、はあと気の抜けた返事を返すだけで精一杯であった。そこから三人は他愛もない話を少しだけする。その大半が姫の愚痴だったりしたが。そしてそんな会話もいずれば終わり、別れるときとなる。その別れ際、ウィルは湖見つめて、そしてそのウィルの胸に湖から一固まりの水が飛んできて、そしてウィルの腕の中におさまった。

（貴方が望んだもの、我らの体の欠片。これでいいか？異なるもの）

聞こえる声は己が内から、それが先に聞こえた水の精霊の声だと理解して、ウィルは小さく頷いた。そして同時にウィルはこれを機にスクエアになったと告げようと心に決め、カトレアの病を治すことを心に誓った。水の精霊に認められる、スクエアになるきっかけとしては十分だろうとそう思ったから。パーティーが終わってから数カ月後、ウィルはアルザス侯爵を経由して正式に治癒という形で申し込み、改めてヴァリエール公爵領を訪れていた。そして今、カトレアの私室で公爵やその夫人にすら見つめられながらウィルは行動を起こしている。

「まず、この水を飲んでほしい。それはラグドリアン湖の水の精霊の涙と呼ばれる秘薬だから、それを使ってやってみるつもりだ」

ウィルの言葉にカトレアは微笑んでから何も言わずにそれを嚥下する。そして飲みほしたところに水の入ったグラスが渡され

「そしてそれを持って胸に当ててほしい。その中も水の精霊の秘薬が入っているから」

「・・・これでいいかしら？それじゃあ、よろしくね、ウィル」

全て言うとおりにしたカトレアは、身を任せるように目をつむる、ウィルは一度公爵を、水のスクエアたる母を、ぐるりと見回してから軽く息をついて、そして誰にも聞こえないように口を動かす。実際この魔法に詠唱など必要ないのだ、だからこそ、これは自身が異端にならないためのただの行動、だがそれと同時に呟かれる言葉は、水の精霊への呼びかけでもあった。

（カトレアの異常は大きく分けて二通り、先天的な身体異常、大凡白血病と称されていたものの可能性が高い。もう一つは先天的魔力回路異常。魔法を使う機関、魔力回路でも魔力核でもどっちでもいい、その異常・・・だから）

水の精霊がカトレアの体を巡る水となってカトレアの全てを精査する。身体機関、魔力コア、回路。全てに巡り、水の精霊からウィルにしか聞こえない言葉で知らされる。

「どうやらこの単なる者は血がおかしい様だ、おまえの流れる血と質が違う」

どうやら、白血病の可能性が高い、そうウィルは判断した。そして用いるは異界の魔法。足りない魔力は水の精霊の秘薬で補う。それでも足りないならば水の精霊の加護を用いる。こと癒しにおいて、ハルケギニアと言う大陸で、ウィルの横の立てる物は誰一人いない。なぜならば彼には

「・・・リフレッシュ！」

水の精霊が付いているのだから。人の精神と癒しに関連する精霊が祝福した存在、その治癒は異界の法に則り、そしてカトレアの抱いていたグラス、そこに入っていた水の精霊の欠片が全てカトレアへ

と流れ込んでいく。白血病、自身では骨髓性かリンパ性かもわからない、ならばその不足を精霊で補う、身体にある異常に精霊を用いる。そして自身の魔法で病と呼ばれるものを治していく、途中にある過去の治療後、邪魔になるそれらを精霊が浄化していく。行うことは治療にして生成、足りないそれを新たに作る機関を設ける。さらに邪魔な腫瘍を精霊で取り除く。そしてウィルが自身の精神力をすべて使い果たした時、カトレアがゆっくりと倒れこんだ。公爵は慌てるが夫人はどこか落ち着いたようにそれを抱きとめ、静かにベッドに横たえる。そして感じる呼吸に、苦しげなものが含まれていないことを確認し、はじめてその顔に笑みを浮かべた。

「・・・明日・・・さめ・・・るう」

精神力を使い果たしたウィルも同じように意識を失い、次にカトレアが目覚めますのを一同は横で意識を失って倒れた者を含めて微笑ましく見つめ、扉を閉めた。

「姉さま・・・ちい姉さま治る？」

「・・・豊穰のウィリアムが全力で治療したのよ？それも今は決して精霊が譲ることのない水の精霊の秘薬まで使って。これで治らなかったら、カトレアを治す術は無いと思いなさい」

豊穰、それはウィルに与えられた二つ名だった。水の精霊に祝福されてからウィルはスクエアとして金の錬金を行い、そしてその治療は明らかにスクエアクラスだと母リリアが太鼓判を押したのだ。そんな彼の功績のうち、領地の畑を整え土壌を豊かにしたことがあげられる。それゆえに豊作を導いた彼に与えられた名前が豊穰、大凡戦いが似合わないその二つ名は、けれど民に喜ばれるものだった。

「そうよね！だってウィルですものね！」

「いいからちびルイズ！あんたは早く魔法が使えるように練習なさい！」

「いひゃい、いひゃいですねえひゃま！」

ぐにぐと末妹の頬をつねりあげながらエレオノールは少し残念そうにつぶやく、そして自身の相手になるであろう男を比較してみても、溜息が漏れる。

「はあ・・・あと5年遅く生まれていれば・・・」

次の日、ウィルは温かい何かに包まれている感覚で目を覚ました。そして動こうとしても動けないことに疑問を覚えて振り返ろうとした時。

「おはようございます、ウィル様」

「・・・おはようございます、カトレア様」

何故かカトレアに抱きしめられていた。そして何故かカトレアに様づけで呼ばれ自分も咄嗟に様づけで返していた。そんなウィルにカトレアは心底面白そうに笑う。そして、抱きしめる腕に力を込めた。

「ウィル、ウィリアム様。貴方は私に生きる道をくださいましたわ」

カトレアの言葉にウィルは何も言わず、ただ無言で抱きしめられていて

「貴方は数年前の誓いを果たしてくださいました、自分のことだからよくわかります、息をするのがすごく楽で、きつと今なら魔法を使っても平気でしょう、だから・・・」

今度は私の番ですわね

そう呟かれ振り向かされた顔、そしてウィルはそつと唇を重ねられた。ただ触れるだけ、それでも自分の顔が真っ赤になっているとウィルは自覚する。そして視界一面に広がるカトレアの顔もほんのりと朱が差さっていて、そして重なるとき同様、静かに二人の唇は離れた。お互い面と向かっている筈なのに、視界が少しだけそれていて

「私はこれから、貴方のために尽くしますわ、ウィリアム様」

カトレアはそれだけ囁いてそつとウィルを手放した。そして普段の彼女からは想像できないような、そう・・・いつもの儚げな微笑みではなく満面の笑みを浮かべてこう言うのだ。

「ありがとうございます、ウィル」

そのたった一言で、ウィルの心は満たされていて、それをこつそりと風の魔法で聞き入っていた公爵夫人、カーリーヌが薄く笑みを浮かべて夫であるヴァリエール公爵とその友人でありウィルの父であるアルザス侯爵のところに向かい、二人の婚儀を結ぶ日すら決定したという。婚儀の日取りは、ウィルの魔法学園入学の2年前、つまり来年と言うことで決まった。随分と日が開くようではあるがこれには理由がある。公爵家に侯爵家、双方トリステインを代表する大貴族の支柱を為している、それ同士の婚儀だからこそ慎重に準備を進めなくてはならない。婚儀の規模も家に見合ったものにしなければならぬ。だからこそその準備期間に1年と言う日をおいたのだった。

二人の結婚が決まって、問題になったのはウィルの妹のアリアだった。兄至上主義とまではいかないが十分にブラコンの気があった彼女は頑なにカトレアのことを認めなかった。アリアからしてみればカトレアはどこぞから湧いてきた敵に過ぎなかったのだから。だか

らこそ、カトレアは熱心にアリアのもとへと通っていた。尤も、ア
ルザス領を訪れる理由はウィルと会うためというのが大半ではあつ
たが。そんなカトレアの努力が実るのは半年もたってから、これと
いった出来事も無く最終的にアリアが折れた形となっていた。曰く。

「はあ、私に嫌われているというのが分かっていてでしょうに、こ
うまで必死になられたら認めざるを得ませんわ。これでは私が悪役
みたいではありませんか。・・・それに、最近は兄さまにも色々と
・ ・ な、なんでもありません！」

こんな風に認められたのだった、そしてアリアは何だかんだででき
る姉という存在に少しばかり心を躍らせていた。アリアに認められ
て結婚の準備は益々進んでいく、そして招待されている者の名前に
ウィルは驚きを覚えていた。親族以外を羅列すれば、マリアンヌ皇
太后、アンリエッタ姫、ウェールズ皇太子、クルデンホルフ大公、
ロレーヌ伯、グラモン元帥、その他の大貴族が一通り書き記されて
いるのだ。そして結婚の場合は誓いの湖ラグドリアン。それを見て、
改めてこの結婚がどれだけの大事かを理解して、本当にいいのかと
悩みもしたが、そんな悩みは幸せそうに笑うカトレアの前に霧散し
た。

父アルザス侯爵は笑う「この祝いの場を用意するだけでウィルの頑
張った分が消えてしまうな」

母リリアは笑う「それでもこの結婚はトリステインの中でも特に大
きくしなくてはいいけませんわ。なにせ歴史あるヴァリエールとアル
ザスの仲がさらに深まるのですもの」

妹アリアは不貞腐れる「・・・ふんだ、兄様の馬鹿！」

約一名素直ではなかったが、温かく祝福してくれる家族にウィルは
笑みを浮かべる。そして結婚式、カトレアとウィルは家族のみなら

ず、世間に祝福されていた。貴賓は口々にこう言う、お似合いだ、お幸せにと。喪に服し、表に出ることが少ないマリアンヌ皇太后からも直々に祝いの言葉を受け取る。結婚の詔はアンリエッタが自ら志願して述べていた位だ。ウェールズとアンリエッタはたった一晚の友を祝福する。カトレアと血縁にあることもそれを後押ししていた。カトレアはその晩フォンティーヌ姓からアルザス姓にその名前を変えていた。元々フォンティーヌの領地は彼女のために一代限りで用意したヴァリエール公爵領の分地、それ故にフォンティーヌ領は再びヴァリエール領となった。

ウィルは元々アルザス侯爵領の後継者である、だからこそカトレアが住む場所も自然アルザス領となっていた。少し大変だったのは彼女の部屋にいた動物の移住。だがそれもアルザス家は喜んで引き入れていた。ウィルの学園入学までの二年間。彼らは静かにアルザス領で過ごすのだ。尤も、時折カトレアに甘えに来るルイズがいて、カトレアからウィルを奪おうとするアリアがいて、本当に静かだったかは分らないが。

「ウィル」眠るルイズとアリアを膝に乗せてカトレアがウィルを呼ぶ。

「どうした？カトレア」ウィルはそんなカトレアを微笑ましく見守りながら答えた。

「私ね、今すごく幸せなの・・・だからね」カトレアはせがむ様に目を閉じて、ウィルは苦笑しながらカトレアの唇に自身のそれを合わせた。触れるだけで離れたそれを、カトレアは幸せそうにほほ笑む。

「愛していますわ、ウィル。私に生をくれたお方。だから待つわ。貴方が学園を卒業するまでこの家で。それと出来るなら」

そして彼女は自分の愛する妹の髪をなでる。今のカトレアの唯一の

心配はこの小さな妹のことなのだから。

「ルイズのことを、助けてあげてね。きっとこの子は意地を張ってしまうから」

「ああ、心配するな。義兄と慕ってくれるルイズをわざわざ見て見ぬふりするほど腐ってはいないよ」

カトレアを治したウィルのことをルイズは義兄と呼び、懐いていたのだから。尤も、最初はカトレアを取られたといじけていたのだが、そこはアリアとの出会いが解決してくれていた。今まで末の妹だったルイズにとって一つとはいえ年下のアリアの存在は自身を姉として、そうまるでカトレアのようにふるまうのを心がけたのだから。そしてそれが心の余裕につながり、アリアがラインメイジだと知ってその余裕が焦燥にとって代わりもしたが、概ね関係は良好だった。

学園に入るまであと数カ月、短くも幸せな二人の生活に一区切りがつくのだ。だから、カトレアは少し不貞腐れたようにおどける。

「学院はある意味結婚相手を見つける場でしょう？侯爵家の貴方に妾を取るなどでは言わないけど、浮気はダメよ？」少しばかり發揮されるヴァリエールの独占欲にウィルは笑う、最近のカトレアは少しだけヴァリエールの女らしいと思い。

「するにしても相手は選ぶさ、カトレアが納得できるような人をね」「あら、それなら安心だわ。私が納得しなければいいのですから」

二人は笑いあう。顔を見合わせて笑いあい、ウィルはこれから起るルイズを中心とした出来事を、そして彼女が呼びだす彼のことを考えて、一人思案にふけるのだった。

――全ては、一人でも多くの人を救うために――

ブローグ2：学園入学手前まで（後書き）

今回二つ特殊魔法（要は多重クロス要素）ができましたのでその記載を。

リフレッシュ（元ネタはソードワールド）水のドット→水・水・水・水のスクエア（治す難易度によって変動する）

病気、毒等を治癒する。元々は達成値のない石化等を問答無用で直す神聖魔法。ただしこれは神を選ばないので私的解釈として信仰する心があればいいとした。病を治すためには達成値の二倍必要だが、今回は水の精霊の秘薬と欠片を持って強制成功イベントのようにしてみました。

インブレイス・エンド（テイルズD2）水・水・水・水のスクエア周囲を凍結させたうえで上空の大気を凍らせて落とす↓具現結晶アクア・リムス 水の精霊の力を借りる、敵に水撃、自分たちに癒し。テイルズ系お約束の詠唱付き。この魔法が使えるがゆえにウィルは水の精霊に愛されています。具現をするのはいつのことになるやら・

学院一年目：1話

「あゝこれより諸君には貴族としての……」

普段は食堂でもあるアルヴィーズの食堂でウィル達の世代の入学式が執り行われていた。今は学院長でもあるオールド・オスマンがその長い歓迎の言葉で新入生たちを疲れさせていて、ウィルその中で意識を他に移しながら、どんな人がいるかと調べていた。特に気にかかるのがウィルの知識にある物語に出てくる人物達。そしてすぐに目につくのは赤い髪でこれ見よがしに隣の男を誘惑し、その隣の女性を歯ぎしりさせているキュルケ。

もう一人はガリアの王族のみが許される青い髪の少女タバサ。位置関係からルイズの姿は確認できず、しかしこれからの未来が自分の知っている通りになるかウィルはまだ半信半疑であった。元々ウィルの持っている知識が魔法の考察等に偏りすぎているという事もあって物語全体を言えば大まかな大きな出来事を概要だけといった具合なのだ。

「……えゝそれでは諸君をトリステイン魔法学院に歓迎しよう！」

思考の海に埋没していたウィルが気付けばオスマン翁の話は終わったようで、新入生のほとんどは安堵からため息をついていた。そのあと2、3各先生から言葉を受けて其々のクラスの発表、ウィルはルイズやキュルケ達と同じクラスだったことに安堵した。そして次の日、最初の授業の日となった。

「よお、ウィリアム。どうやら同じ組らしいな、まあ風のロレーヌと土のアルザスの仲だ、一年よろしく頼むぞ？」

「ヴィリエか。ああ、こちらこそよろしく」

クラスの面々を確認するために周囲を見渡していたウィルに話しかけたのはお隣の領地を治めているロレーヌ家の次男、ヴィリエ・ド・ロレーヌ。貴族らしい尊大な態度が目立つが同世代で近隣の関係だったことからヴィリエとウィルはそれなりの友情を持っていた。尤も、ヴィリエの方は魔法のことでウィルに嫉妬もしたのだがウィルがヴィリエの風ではなく、土と水のメイジであることからその感情もかなり緩和されたが。

「まさか入学するとは思わなかったな、てつきり新婚を満喫すると思っていたが」

「虚無の曜日にはなるべく帰る予定だけどな。元々学院には入る予定だったし、それに・・・な」

ウィルが向ける視線の先には公爵令嬢だからこそだろうが、十把一絡げに纏められる貴族たちが群がっていて、ルイズは愛想笑いを浮かべてそれを嫌々いなししていた。その隣ではキュルケが下心丸出しの男にたむろされていたりもする。

「ああ、お前の義妹か。確か魔法が苦手なんだったか？まあ、公爵家のヴァリエールと侯爵家のアルザスを敵に回す馬鹿はいないと思うがな」

「そう願うよ」

貴族の殆どがルイズとキュルケの二人に群がり、少し離れたところにウィルとヴィリエ。更にはなれたところにタバサ等がいる教室に背の高い教師が一人

「私はギトー。疾風のギトーだ。・・・ふん。トライアングルが二

人にスクエアが一人。あとはラインも少なく大半がドットか・・・
「不作だな！」

軍靴を打ち鳴らすように苛立たしげに足で踏みこむ。突然入ってきた教師の突然の物言いに生徒である貴族、特にドットの貴族の大半は不機嫌そうに顔を歪めた。それでも相手は教師、なるべく表に出さないようにするのだが、繕った笑顔が引き攣っているのを見てウィルは苦笑を漏らす。特にルイズの腹立たしそうなあの笑みには、ついつい温かい笑みを浮かべてしまう。

「しかも唯一のスクエアは土と水と聞く！最強足る風は確かに習得が難しいがこれはあまりにも酷いとは思わんかね？」

さりげなく風至上主義を前面に押し出しつつ教師、ギトーは嘲笑を浮かべながら語りかけてくる。

「まあいい。教えるにしてもまずは各々の實力というものを見なければなるまい。今日は一人一つ、自身の得意とする魔法を見せてもらおう。時間も無い、たとえ失敗しようとして一人一度だけだ、さあ早くするがいい！」

順々に名前を呼ばれ魔法の行使を見られる。そしてヴィリエの名前が呼ばれ

「ラナ・デル・ウィンデ・・・エア・ハンマー！」

「うむ、風のライン上位といったところか、流石はロレーヌだな」

風のライン、それも上位の魔法を見てギトー先生が偉くご満悦になった。そのあとルイズの失敗魔法の爆発をトライアングルかといぶかしんだりそのあとのキュルケの魔法に嫌々高評価をつけたり、

そしてタバサが呼ばれ

「ラナ・デル・ウィンデ、エア・ハンマー」

「お、おお！トライアングルクラスのエア・ハンマー。それも詠唱も早い。うむ、見事だ」

ヴィリエよりも精緻な高威力、そして高速制御を見てギトーをタバサを褒め称え、タバサは素知らぬ顔で踵を返した。それに対して、キュルケが見下すような視線を向け、ヴィリエが歯ぎしりをして悔しがる。その眼には憎々しげな色が灯っていた。

「さて・・・問題の土メイジだな。鍊金で調べてもいいが今回はゴーレムを見せてもらおうか。今から言う二人で自身のゴーレムを戦わせてみる、これなら術者に怪我がなくていい」

土メイジは全体の割合として数が少ない。そして土のラインですら数人しかいない。なのにこのクラスには土のスクエアがいて

「ギーシュ・ド・グラモン！ウィリアム・ド・アルザス！」

ギーシュはその顔を真っ青に染め上げた。

「ま、まさかいきなりスクエアと当たるなんて・・・いや、けれどここで僕のすごさを見せつけられれば・・・ふ、さあ！来たまえウィリアム！」

真っ青の顔を土気色にして、その顔はすぐにだらしな欲望まみれの表情に変わった。ウィルはギーシュの名に覚えがありいきなりかと苦笑しながらレイピア状の杖を構え、ギーシュはバラの造花のような杖を構える。

「義兄様！頑張つて！」

そしてウィルの後ろからルイズの声援が飛ぶ。ギトーも何か言いたそうにしたが相手がヴァリエールだったことも手伝つて黙殺した。ウィルは苦笑を更に濃くして軽く片手をあげて返事を返し、ギーシュは面白く無さそうに眉を顰めてから「鍊金！」と高らかに叫び青銅のゴーレムを5体作り上げる。

「さあ、君も出したまえ。僕のワルキューレがお相手しよう！」

ドットという前情報があつたことも手伝つてギーシュがいきなり5体のゴーレムを生成したことに当たりは驚きを覚えた。ラインではないかと疑う者も多く、金髪でそばかすが目立つ少女はその姿にやるじゃないと小さく漏らす。

「ゴーレムの数で攻めるか。いや、いいけどな？俺も似たようなものだし。それが全力でいいんだな？グラモン」

「何を言っているのだね？5体ものワルキューレだ、まさか豊穣のウィリアムが怖気づいたのかね？」

記憶では7体のワルキューレとかいうゴーレムなんだがなあと思いながらウィルも杖を軽く振り「クリエイト・ゴーレム」鍊金ではなく、そう呟いた。生まれるのは二匹の獣。四足獣のそれはまるで犬のように、狼のように。

「は！スクエアともあろうものがたつた二匹の獣を作るだけかい？」

ギーシュはそらに鍊金を施しワルキューレに剣を斧をと持たせる。

その様にウィルはため息をついて

「では、はじめようか！」

ギーシュのワルキューレ4体が二体ずつウィルの犬に襲い掛かった。攻撃は必然全て振りおろしにならざるを得ないそれを

「戦女神、良い名前だけどな？とりあえず名前負けだ。双頭の番犬
！」

ガ、ガゴンという音が二か所から響き、ギーシュのワルキューレはその足をもがれ、手を噛み砕かれていた。武器をなくし手を失ったワルキューレにはさらに追撃を、足を砕かれたワルキューレはもはや立つこと叶わず地に臥していた。

「そんな！僕のワルキューレが！？」

「いや、そのゴーレム青銅だろう？俺の番犬は鉄だ。それも人型じゃないからその分軽くできるしなにより牙の部分だけ鋼鉄を意識すれば負担も減る。有る程度当然の帰結だと思うけど、どうだろう？」

言いながらも番犬二匹はペツとワルキューレの残骸を吐き出して、じりじりとその距離を詰めている。

「だがまあ、青銅の割には硬いし構成も粗いとはいえ5体はすごい。それにゴーレムでの目標も似てるしね、よければまた手合わせしよう」

「・・・は、ははは」

乾いた笑いを浮かべるギーシュをよそ眼に番犬は両側からワルキュー

ーレを噛み砕いてその存在を地に落とす。そしてワルキューレを処理し終わってからギーシュの足にその鼻を一度擦りつけてウィルの元へと戻っていった。

「スクエアのゴーレムが、大きければいいというものでもないのね」
「・・・」

「流石義兄様！」

これらの声だけでなく周囲からはざわめきが聞こえギトーが怒鳴ってそれを沈める。

「は、はあ。まさか父上に何と報告をすれば・・・」

ギーシュの家系、グラモンは軍人家系だったこともありギーシュはドットながら戦闘を意識して多少なりとも訓練を積んでいた。それが同じ軍系のアルザスの嫡子に一矢報いることなく敗北したのだから報告しないわけにはいかないが、父から賜る怒声か失笑が浮かんで頭を抱えて。

「ギーシュ・ド・グラモン」

「・・・何かな、ウィルアム・ド・アルザス」

「俺のことはウィルでいい。同じ土メイジだ仲良くやろう」

悩みの種に友誼を申し込まれた。そしてギーシュは考える。この一件でアルザスと友人関係を結べたとなったらどうなるかと、そして灰色の脳みそは邪な感情を交えつつ利が多いことを悟り

「僕のことはギーシュで構わないよ、ウィル」

「ああ、よろしくギーシュ」

他の土メイジがゴーレムをぶつけ合っているのを気にすることなく握手を交わした。そしてその日の授業は終わり。

「タバサ！貴様に決闘を申し込む！」

ヴィリエがタバサへ決闘を申し込んでいた。周りは騒然としたしウィル求めようとしたのだが曰く自分よりも上手く風を操れるのが気に入らないという子供じみた理由ではじめてしまった。タバサが受けたことにも周囲は驚いていたが。

そして決闘はエア・ハンマーやエア・ニードルの打ち合いをヴィリエが必死の思いで、タバサが涼しい顔をして互角を演じ、タバサのウィンディ・アイシクルでヴィリエのエア・シールドを貫通しヴィリエの杖をタバサ叩き落とすことで決着を見た。

「ウィル、ウィリアム！とめてくれるなよ！？僕はあいつが許せない！」

「だから待てヴィリエ。たかがとはいわないがそれじゃあ完全に逆恨みだらう！？」

ヴィリエが止まりそうにもないほど激昂し、それをウィルは必死になだめる。それでもヴィリエが止まらないからこそ、ウィルは仕方ないと思い溜息をつきながら声を落としながら囁くように語りかける。

「ヴィリエ、今から俺が言う事を誰にも言うな。俺はまだ死にたいとは思わん」

「・・・なんだ、何が言いたいんだウィリアム！」

「タバサという家名もない不自然な名前、そして青い髪、卓越した魔法技術。これだけでとあることに行きつけないか？」

ヴィリエは貴族らしい貴族だけ会って傲慢ではあるが逆らったり喧嘩を売ってはいけない相手等は心得ている。それは自分の身を滅ぼすからだ。その中には当然アルザスやヴァリエール、クルデンホルフ等が入り、各王家、ロマリアの教会などがあげられる。そして、ヴィリエは次男ながらも名家ロレーヌのトリアングルも間近のライメイジだ、それ相応の教養だつて身につけている。普段はストッパーがいらないから激しやすいが歯止め役さえいてくれれば

「・・・分かった。ああ分かった、分かっちゃったよ！くそ！忘れ形見か！？なんだよ・・・ああ、ウィル。悪い。今度は完全に僕が悪い、悪いんだが・・・今日はお前の部屋で飲ませてくれ。というか、僕もこんなことは知りたくなかったぞ！？」

「アルザス産でお前の好物のミユスカが何本かあったな・・・それを開けよう。昨日食べた料理からこのコックは腕が良いのも分かっているしな。気付けに一本差し入れて美味しい摘みでも作つてもらうさ。だからまあ気を直してくれ」

タバサへの怒りを完全に愚痴で晴らすことにしたヴィリエに苦笑しながら部屋へと戻っていく。

余談だが、ワインを差し入れたウィルとその隣にいたヴィリエに対して料理長であるマルトーは驚きながらも自分が作れる最高のつまみを提供し、ヴィリエに指定されたメイドであるシエスタは怯えながら二人の酌のために一晩をウィルの部屋で過ごし、チップとしてちよつとした小金（10エキュー）を手にして実家へ仕送りしたの

だ
っ
た。

学院一年目：1話（後書き）

アルザス・ロレーヌ地方とか言われるだけあって二人は流石に顔見知りで年齢が近いから友人だろうと思いきうしました。ちなみにミユスカはマスカットです。白ですね。私は白が好きだ（マテなんか今回でタバサ×キュルケフラグがとか知り合いに言われたけど。ヴィリエがいなくても嫉妬の心できつと大丈夫。と信じつつ。

ウィルのゴーレムは基本犬です。私が犬好きだからではない、断じてない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073j/>

ゼロの使い魔で転生物

2010年10月9日22時02分発行